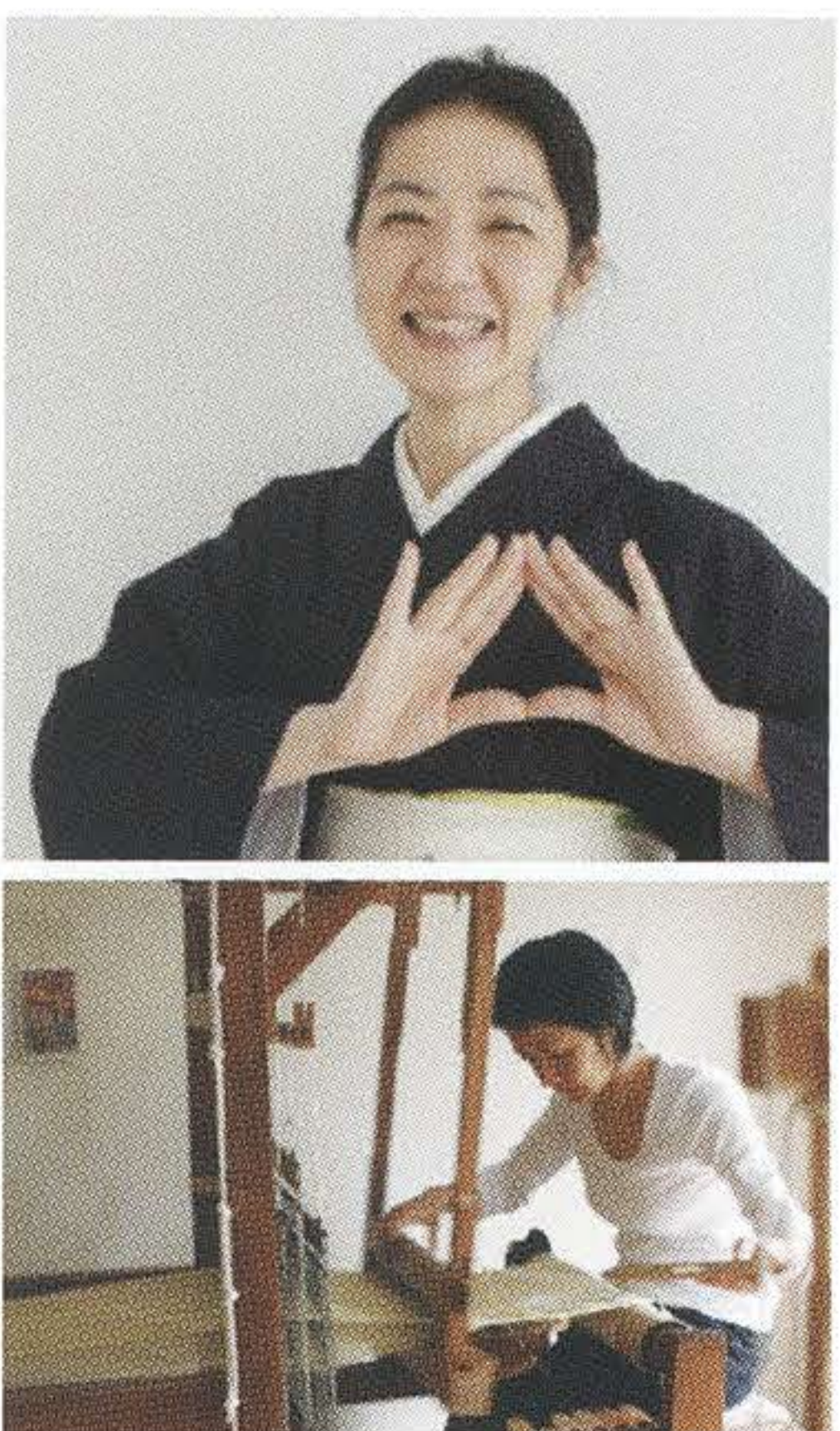


になる。何気ない日常の輝きに気づくことができるようになる。何だか人生が豊かになった気がしている。

お客様と真摯に向かい合う

「染織吉田」主宰

吉田美保子（昭和62卒）



原稿のテーマが「天地万象皆わが師」と知りギクリ。難しいな。とにかく書いてみようか。今の私の生活の中心は仕事だから、「師」はきつとそこにもいるはず。私は染織の仕事をしていて、絹糸を染めて、機織りして、帯や着物を作り、着物専門店や個人に販売しています。「only only」というフルカスタムメイドの注文制作をメインでやっています。お客様が望む着物や帯を、好みのイメージをお聞きし、デザイン画を作り、話し合いをしながら、糸を選び、染め、織り、世界でひとつだけの、お客様のための物作りをしています。

ご注文くださるお客様はいろいろです。大の着物通から、ビギナーで最初の一枚を欲しいと言う方まで。女性がほとんどですが、男性もいらっしやいます。

最近思うことは、お客様のご希望を

かなえようと無心に取り組めば取り組むほど、自分の枠を越え、いいものが織れるってことです。

お客様のご希望はさまざままで、着物業界の常識に添ってないことも。その場合は、ひとつ、ひとつ、確認しながら進めます。お召しになりたいというお気持ちをお大事に。でも、着物としてどうなのか。また、お召しになって出掛けた先で居心地悪い思いをさせてもいけませんものね。何が大事か、譲れない点はどこなのか、そこを一緒に探ります。

そうやって取り組んでいて、ハツと気付くと、今までとは違う、ビックリするほどいいものが出来ることがあります。私が自分で、無意識に固く閉ざしていた、常識という分厚い扉が開いて、澱みが一扫できたのです。「オープン・セサミ」を唱えてくれたのは、もちろんお客様。どうもありがとうございます！

お客様が本当に着たいものを作るためにはどうしたらいいのか？それも、お望みをかなえた上で、さらに、カッコよく、着心地よく、着ていった先で居心地よく、お互いに腹を割って話し合いを重ね、一心に仕事することで、それはきつと達成できます。

着るものは着る人の生き方が現れると思っています。私の仕事は、純真にそれを作ること。お客様と対等にガチで向き合うことで、仕事は進みます。私にとって、お客様と真摯に向き合うことが、師であると思います。